

# 教育研究業績書

2020年10月27日

所属：看護学科

資格：助教（臨床）

氏名：大西 舞子

研究分野	研究内容のキーワード
母性看護学	母性看護、周産期ハイリスク、アロマセラピー
学位	最終学歴
修士（看護学）	大阪府立大学院博士前期課程

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. 母性看護学の臨地実習指導	2018年4月～現在	武庫川女子大学看護学部母性看護学実習(専門教育科目・必修2単位・3年次後期・特別学期・4年次前期)において、臨地実習引率の役割を担った。6つの実習施設において、学生の毎日の行動目標・計画、看護計画について指導を行い、病棟臨床指導者と連携して、学生にとって、学びの多い有意義で効果的な実習となるよう日々調整を行った。必要時、学生とともに看護を実践した。学生同士の学びの共有として、学生主体で行う日々のカンファレンス、及び最終カンファレンスでは、病棟臨床指導者より臨床の視点からの意見を踏まえ、実習での経験と知識や理論を結びつけられるよう意識して臨地実習の指導を行った。
2. 妊婦体験ジャケット・新生児人形を用いた体験学習の実施	2016年4月～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「初期演習Ⅰ」(基礎教育科目、1年時配当、必修2単位)において実施した。今後の学習の動機付けとなるよう、母性看護学分野の対象や具体的ケアについて講義を行った。助産師の役割、助産師の数や看護師との違い、助産師になるための教育課程の紹介を行い、助産師の職務の内容としての臨床経験談や助産師になって良かったことなどを講義した。また、分野教授・准教授とともに赤ちゃん抱っこ体験や妊婦ジャケット着用を体験を通じ、実際に妊婦体型での階段昇降、靴下を履く、高いところのものを取るなどの動作の実施や、新生児の抱っこの方法の実施について体験型の学習を実施した。学生からは思ったよりも重く大変だということが体感できたとの声があった。
3. 視聴覚教材を用いた講義の実施	2016年4月～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「母性看護学Ⅰ」(専門教育科目、2年時配当、必修2単位)において実施した。出生前診断の講義で、出生前診断における、夫婦・家族のそれぞれの思いや迷い、決断の実際を知り、医療者としてどう説明し、どう関わるべきかを検討することを目的とし、TVドラマこちらのどりの一部を視聴した。その結果、出生前診断についての理解の深まりとともに、自分だったらどうするかというふうに自身にひきつけて考えてみることや、ケア提供者としての関わり方について考える機会となった。難しく重くなりがちな内容でありながらも、わかりやすくイメージしやすい視聴覚教材を効果的に用いたことで、学生は視聴後の講義も集中して聴くことができていた。
4. 看護師国家試験を想定した小テストの実施	2016年4月～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「母性看護学Ⅰ」(専門教育科目、2年時配当、必修2単位)において実施した。講義担当准教授とともに、看護師国家試験問題の過去問題や想定問題などを参考に、小テストを実施した。講義2・3回に1回のペースでこまめに実施する事や、小テストはすぐに採点し、次の講義で返却することで、見直し復習を促し、記憶の定着化を図った。
5. 講義配布資料の工夫	2016年4月～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「母性看護学Ⅰ」(専門教育科目、2年時配当、必修2単位)において実施した。講義はパワーポイントで行い、学生への配布資料はパワーポイントをもとに作成し、重要な用語については穴抜きとした。学生は穴抜きの箇所を記入しなければならぬため、重要語句を集中して聞き取る必要があり、集中力を持続させて講義を受けることができた。穴抜きの数は多くなりすぎて書くことばかりに集中しすぎないように、1枚のスライド中に1~3カ所程度とするよう配慮した。
6. PBL (Problem-based Learning) を取り入れた看護倫理事例検討グループワークの工夫	2013年4月～2017年3月	出向先の看護協会・学会関連研修(京都府看護協会新人助産師研修、第10回母性看護学会セミナー、助産実践能力習熟段階(クリニカルラダー)CLOMiP研修)で実施した。 看護の倫理綱領・倫理的概念・看護原則及び倫理分析と意思決定のためのモデル紹介を講義形式で行った。その後、事例への倫理分析・介入の実際について、受講者が自らの倫理観を客観視し把握できるよう他機関にわたる少人数のメンバーでグループワークを実施した。グループ内での意見を統合して発表してもらい、他グループとの共有を行いつつ、グループディスカッションを重視し

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
7. 現役臨床助産師、母性看護専門看護師の経験を生かし、大学、大学院、専門学校等での母性看護や助産学に関する講義・演習を担当（非常勤講師）し、最新の知識・技術を教授	2009年～現在	、能動的学習を促進させるようにした。受講者アンケートでは、自分の個人的価値観について改めて客観視して気づくことができ、自己認識・自己洞察の機会となったとの記述があった。 出向先の大学等（京都府立医科大学、関西福祉大学、日本赤十字豊田大学大学院、京都第一赤十字看護専門学校、富山大学大学院、大阪医科大学大学院、大阪府立大学の看護学科、研究科（修士課程））で実施した。看護・助産学生には妊婦・新生児の看護についての講義を実施するとともに、疼痛緩和へのアロマセラピーの活用の実例を紹介し演習中心の授業も展開している。また、レポート課題で授業外における学習促進の取り組みを行っている。大学院CNSコースについてはCNSの6つの役割に沿った活動の実例の紹介と事例レポートのまとめ方、役割拡大の実例について、もともとの組織に戻った場合と新たな組織に所属した場合、それぞれにおいて、臨床現場で必要とされる能力などを具体的に教授。臨床と教育の乖離を少なく出来るよう臨床での経験を生かし、現場に即した内容の講義を行った。
8. 2) アロマセラピーの体験型授業を実施	2009年～現在	出向先の大学等（京都府立医科大学、関西福祉大学、京都第一赤十字看護専門学校）で実施した。補完代替療法や疼痛緩和の方法として、エッセンシャルオイルを使用し、実際にケアの現場で活用できるルームスプレーを認知させるため、学生個々にオイルブレンドを作成させるほか、アロマ足浴、アロマトリートメント体験を取り入れた授業を実施している。足浴やトリートメントは実施する側、される側の両方を体験してもらい、実施される側だけでなく実施する側にもリラックス効果があることや、タッチングによる親密性の高まりなどを実感してもらえるようにした。看護ケアの一方法として有効であることの体感につながった。
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 大阪府立大学看護学研究科 看護学専攻 非常勤講師	2018年4月～2020年3月	大学院CNSコースにおいて講義を実施した。CNSの6つの役割に沿った活動の実例の紹介と事例レポートのまとめ方、役割拡大の実例について、もともとの組織に戻った場合と新たな組織に所属した場合、それぞれにおいて、臨床現場で必要とされる能力などを具体的に教授した。
2. 富山大学大学院 医学薬学教育部 看護学専攻（修士課程）学生への講義・電話相談	2014年4月～2016年3月	大学院CNSコースにおいて講義を実施した。CNSの6つの役割に沿った活動の実例の紹介と事例レポートのまとめ方、役割拡大の実例について、もともとの組織に戻った場合と新たな組織に所属した場合、それぞれにおいて、臨床現場で必要とされる能力などを具体的に教授。また演習、実習、レポート作成中の電話での質問応答・アドバイスの実施を行った。
3. 京都第一赤十字看護専門学校 非常勤講師	2013年4月～現在	妊婦・新生児の看護についての講義を実施するとともに、疼痛緩和へのアロマセラピーの活用の実例を紹介し演習中心の授業を展開している。
4. 日本赤十字豊田看護大学大学院 看護学研究科 看護学専攻（修士課程）非常勤講師	2012年4月～2016年3月	大学院CNSコースにおいて講義を実施した。CNSの6つの役割に沿った活動の実例の紹介と事例レポートのまとめ方、役割拡大の実例について、もともとの組織に戻った場合と新たな組織に所属した場合、それぞれにおいて、臨床現場で必要とされる能力などを具体的に教授。
5. 高校での授業「いのちの教育」一部担当	2007年	助産師としての経験の紹介を通して生命の大切さ、家族計画について教授。人形を用いた沐浴演習を取り入れた授業を実施。学生が生命の尊さを再認識し、正確な避妊に関する知識を得、育児に興味をもつ機会となった。
6. 看護学生・助産学生の臨地実習指導	2003年4月～現在	看護学生の母性看護実習指導、助産学生の外来保健指導、病棟での分娩介助、授乳、個別退院指導等の臨地実習指導。アセスメントの視点や看護に必要な情報収集の実例、分娩介助技術習得を目指し段階的にサポートした。
<b>4 その他</b>		
1. 日本看護協会助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）CLOCMiP研修講師	2019年10月2日	日本看護協会助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）CLOCMiP研修の講師を務め、看護師・助産師の倫理綱領・倫理的概念・看護原則及び倫理分析と意思決定のためのモデル紹介を事例を交えて講義形式で行った。また、法的根拠を提示し事例を基に具体的に関連づけられるようにした。その後、事例への倫理分析・介入の実例について紹介した。受講者が自らの倫理観を客観視し把握できるよう他機関にわたる少人数のメンバーでグループワーク形式で事例検討した。
2. 助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）CLOCMiP研修講師	2018年10月3日	日本看護協会 助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）CLOCMiP研修の講師を務めた。看護師および助産師の倫理綱領・倫理的概念・看護原則及び倫理分析と意思決定のためのモデル紹介を講義形式で行った。また、法的

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
<b>4 その他</b>		
3. 医療機関での勉強会講師	2016年7月7日	根拠を提示し関連図けられるようにした。その後、事例への倫理分析・介入の実際について、受講者が自らの倫理観を客観視し把握できるよう他機関にわたる少人数のメンバーでグループワークを実施した。
4. 武庫川女子大学 国家試験対策担当	2016年4月～現在	医療法人青葉会神野レディスクリニック勉強会「児童性的虐待」講師として、産科診療所看護職に児童性的虐待について講義を行った。基本的知識として、性的虐待が子供に及ぼす影響とそのアセスメント、虐待に関する法・制度、虐待4分類、国の動きについて紹介した。また初期対応については二次被害防止とオーバートリアージの基本、ダイレクトケアについては、看護職として必要なこととは、何をすべきかという視点で解説した。多機関・多職種連携による継続ケア体制の確立で、虐待発見から自立までの切れ目ない支援を目指す。また、ケア側に生じる問題について講義を行い、事例検討会の必要性を検討した。
5. 兵庫県看護協会（生涯学習）担当	2016年4月～現在	看護学部で国試対策委員として、国家試験関連のオリエンテーション資料や掲示資料の作成、看護師国家試験模試の学内実施、国家試験自主学習の援助、学外講師招聘講座の開講時の運営を実施している。また、担当学生については、個人面談の機会を個別性に合わせて設定し、勉強スケジュールの調整や勉強方法の工夫などのアドバイスを行っている。
6. 学会主催セミナー講師	2016年3月28日	兵庫県看護協会生涯学習担当として、毎年2回のセミナー実施では、演習物品準備、当日の誘導、演習指導やモデルを担当し、参加者アンケート集計も担当した。
7. 専門看護師フォーラム講師	2014年2月17日	第10回日本母性看護学会セミナー「母性看護・助産実践における看護倫理を考えよう」において講師を務めた。講師山本あい子先生（兵庫県立大学地域ケア開発研究所）からは看護倫理の原則を解りやすく説明した。その後、2人目の講師として、臨床での事例を基に何が倫理的な問題か、それを解決するにはどんなケアが必要か、グループディスカッションを取り入れながら具体的な説明を実施した。参加者からは「倫理は難しいと考えていたが、倫理的な問題への対応について学習できたので、今後にかかしていきたい」等の感想が聞かれた。
8. 職能団体の依頼による研修指導	2013年4月～2017年3月	母性看護専門看護師を目指す大学院生、医療職者に対して、その役割と活動の実際について講義を実施した。アメリカメイヨークリニックにおけるCNS活動見学研修での学びの共有、及び、自身の日本での活動の実際について具体的にイメージしてもらうための機会となった。
9. 公的機関（京都市）からの依頼による研修指導	2013年2月28日	京都府看護協会新人助産師研修講師として、京都府に勤務する新人助産師を対象に、看護師・助産師の倫理綱領・倫理的概念・看護原則及び倫理分析と意思決定のためのモデル紹介を講義形式で行った。その後、事例への倫理分析・介入の実際について、受講者が自らの倫理観を客観視し把握できるよう他機関にわたる少人数のメンバーでグループワークを実施した。
		京都市東山保健センター「妊娠期からの子育て支援事業（こんにちはプレママ事業）」の勉強会講師として周産期においてCTG, GDM, PIHなど近年変更された基準、および、流産死産後の対象への関わりについて講義を行った。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. プラクティカルCTG判読スペシャリスト2nd	2017年8月	日本母性看護学会のプラクティカルCTG判読スペシャリスト2nd認定を受けた
2. アドバンス助産師 CLoC MiP レベルⅢ	2016年12月	日本助産実践能力推進協議会の助産実践能力が一定水準に達していることを客観的に評価する審査において助産実践能力習熟度段階（クリニカルラダー）CLoCMiPのレベルⅢの認定を受けた
3. JYA認定インファントサイン	2013年1月	Japan Baby Yoga Associationよりインファントサイン資格認定を受けた
4. ベビーヨガセラピスト	2013年1月	日本ベビーヨガ協会認定 ベビーヨガセラピストの資格認定を受けた
5. NCPN 新生児蘇生法「専門コース」（Aコース）修了認定	2012年4月	日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法（NCPN）Aコースの終了認定を受けた（2017年更新済）
6. 専門看護師（母性看護）	2010年12月	日本看護協会の専門看護師認定を受けた（2015年更新）
7. マタニティヨーガインストラクター	2005年5月	日本マタニティ・ヨーガ協会マタニティヨーガ指導者養成講座を修了した
8. アロマセラピスト	2005年4月	A I A H S アロマセラピスト資格認定を受けた
9. ベビーマッサージインストラクター	2004年12月	イギリス・ロンドンにてピーターウオーカー式ベビーマッサージインストラクター資格認定を受けた
10. 日本アロマセラピー学会認定助産師	2003年12月	

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
11. 助産師 12. 保健師 13. 看護師		
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 日本専門看護師協議会 母性看護CNS事例検討会での症例発表	2009年・2011年	専門看護師認定前後に関わった、周産期ハイリスク事例への関わりについて、調整の役割に焦点をあてて事例紹介し、CNS同士での意見交換、多職種・他部門間での保健医療福祉者との調整方法の検討、最新の情報の共有の機会となった。
<b>4 その他</b>		
1. 職能団体における活動	2017年4月～現在	大阪府助産師会高槻班メンバーとして、高槻市周産期連携の会の研修補助、保健センター、地域医療機関、助産師会での会議における、地域連携のための意見交換などを積極的に行っている。
2. ASFO aromatherapy summer school	2008年	フランス・グラースにてASFOaromatherapy summer school修了

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
<b>2 学位論文</b>				
1. 健康な成人女性における背部アロマセラピートリートメントの上肢末梢血流及び主観的疲労への影響	単	2008年3月	大阪府立大学大学院看護学研究科博士前期課程CNSコース、修士学位論文	健康で育児負担のない女性8名(年齢28～34歳)を対象として、1回60分程度の背部アロマセラピートリートメント(アロマ群)または植物オイルのみのトリートメント(オイル群)を実施した。介入後の上肢末梢血流量の変化を調べたところ、アロマ群では増加傾向、オイル群では減少傾向が認められたが、背部アロマセラピートリートメントによる上肢末梢血流量の有意な増加は認められなかった。生理学的指標では有意差は認められなかったが、少なくとも両トリートメントとも身体への侵襲は少ないことが示唆された。一方、心理的反応ではネガティブな影響を及ぼす可能性は低く、快の感情によるポジティブな影響を及ぼすことが推察された。バイタルサインや主観的反応の変化から、アロマトリートメントとオイルトリートメントでは生体への影響に相違があることが示唆された。
<b>3 学術論文</b>				
1. 健康な成人女性における背部アロマセラピートリートメントの上肢末梢血流及び主観的疲労への影響(査読付)	共	2010年7月	第41回日本看護学会学術総会—母性看護—(茨城) 論文集 p. 36-39	健康で育児負担のない女性8名(年齢28～34歳)を対象として、1回60分程度の背部アロマセラピートリートメント(アロマ群)または植物オイルのみのトリートメント(オイル群)を実施した。介入後の上肢末梢血流量の変化を調べたところ、アロマ群では増加傾向、オイル群では減少傾向が認められたが、背部アロマセラピートリートメントによる上肢末梢血流量の有意な増加は認められなかった。生理学的指標では有意差は認められなかったが、少なくとも両トリートメントとも身体への侵襲は少ないことが示唆された。一方、心理的反応ではネガティブな影響を及ぼす可能性は低く、快の感情によるポジティブな影響を及ぼすことが推察された。バイタルサインや主観的反応の変化から、アロマトリートメントとオイルトリートメントでは生体への影響に相違があることが示唆された。 担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察、発表を担当 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は困難 共著者名：山口舞子、原田節子、中田好則、末原紀美代
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
<b>2. 学会発表</b>				
1. Predictors Of Postpartum Depressive Symptoms In Japan	共	2019年1月	22nd EAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars)	日本における産褥うつ予測因子を検討することを目的に、2施設において222名を対象にエジンバラ産褥うつ病質問票、自己記入式質問紙を用いて実施した。結果として、ソーシャルサポートの低さ、育児環境への不満足、婚姻状況(シングルマザー)が産褥うつに関連しており、メンタルヘルス、経済状態、

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
2. 助産師が心理社会的ハイリスク妊婦を早期から効率よく把握するための視点とケア質的研究(抄録査読付)	共	2018年12月	第38回日本看護科学学会学術集会 示説発表(愛媛)	<p>妊娠中のうつ兆候との関連は認められなかった。今後、対象者数を増やして更なる検討が必要である。                      担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は困難                      共著者名：大西舞子、近藤祥子、古田真里枝、我部山キヨ子</p> <p>心理社会的ハイリスク妊婦を早期から効率よく把握するための助産師の視点とケアを明らかにすることを目的として、助産師を対象にフォーカス・グループ・インタビューを実施した。結果として、助産師が心理社会的ハイリスク妊婦の可能性を効率よく把握する視点は、【年齢差のあるパートナー】【母子手帳の記入文字】などの7カテゴリーであった。ケアとしては【疑わしきは面談】【赤ちゃんの受け入れの査定】【地域保健師との連携】など7カテゴリーが抽出された。助産師は、心理社会的ハイリスク妊婦の可能性を効率よく把握するために、得られる情報の中でも、パートナーとの年齢差に注目していた。経済的困難を予測した視点であった。また、待合室での様子も重要な視点だった。                      担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は困難                      共著者名：大西舞子、我部山キヨ子</p>
3. ハイリスク妊産褥婦レベル分けによる医療機関・地域が連携した適切な支援体制の確立にむけて	共	2017年7月	第53回周産期新生児医学会学術集会 示説発表(神奈川)	<p>A県ハイリスク妊産褥婦新生児援助事業で、医療機関と地域が連携した適切で有効な支援を目的に、緊急性優先性のレベルを3段階に分けた1市4町圏域ルールを策定し、レベル別の家庭訪問までの日数を比較検討した。レベル別対象者数は3:7名、2:41名、1:54名で、医療施設の連絡から地域保健師介入支援までの平均日数は、3:26.2日、2:22.6日、1:22.4日であった。レベル3の対象者への支援までに時間を要した理由として、不定期受診、連絡無視・拒否の傾向があった。リスク因子延べ件数は身体的リスク54件、心理社会的リスク139件だった。緊急性優先性の高い事例ほど、地域からの連絡がつきにくく、支援までに日数がかかった。医療機関受診時や入院中に、地域との面談設定をする必要性が高いことが示唆された。                      担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は困難                      共著者名：大西舞子、神野佳樹</p>
4. A出張助産院開業後の5年間の実績と今後の活動のあり方	共	2017年	第58回日本母性衛生学会総会学術集会 示説発表(兵庫)	<p>A出張助産院開業後の5年間の訪問実績から今後の活動のあり方を明らかにすることを目的に学会発表を行った。業務内容は5つで、B市委託の新生児・産後ケア、母乳育児支援、C産科診療所と連携したオープンシステムの分娩、育児全般の無料育児相談、地域の育児サークル活動である。訪問記録を後方視的に単純集計した結果、総数は1575件で、内訳は母乳育児支援訪問が888件と最も多く、次いで新生児・産後ケア訪問523件であった。訪問は年間350件を超えており、地域の母子保健活動において助産師が必要とされていると推察され、今後も継続していく。特に母乳育児支援の訪問内容から、地域と病院、保健センターの連携が重要と考えられ、さらに連携を強化していく必要がある。                      担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は困難                      共著者名：緒方敏子、大西舞子</p>
5. 心理社会的ハイリスク妊娠の現状と課題についての文献検討(抄録査読付)	共	2016年3月	第30回日本助産学会学術集会 口演発表(京都)	<p>心理社会的リスクを抱える周産期の対象に関する本邦の研究動向を把握し、示唆を得ること文献レビューについて学会発表した。医学中央雑誌web版Ver. 5を用い、飛び込み分娩、高年初産、若年初産婦、マタニティーブルー、産褥うつ、虐待、看護をキーワードに2005年～2014年の文献検索妊娠中に早期発見するための視点となる「妊娠・養育に関する心理社会的ハイリスク要因」について論じた論文、31文献を抽出「妊娠・養育に関する心理社会的ハイリスク要因」として示された内容を集約、カテゴリ分類した。個人的要因、経済的要因の基盤的な要因と妊娠に伴うポジティブ要因、ネガティブ要因の4つに分類された。                      担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
6. 組織に根付いた母性看護CNSの役割獲得を目指して〜クリニックでスタッフナースとして活動するCNS〜(抄録査読付)	単	2014年6月	第16回日本母性看護学会学術集会 示説発表(京都)	<p>担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は困難 共著者名：大西舞子、我部山キヨ子</p> <p>新しい組織に移ってすぐの母性CNS活動の実際について、役割獲得に焦点をあてて報告した。個別性・専門性の高い継続ケアを推進するためにCNSとしての視点をもつ他活動として、組織分析に基づき立ち上げたハイリスクケアチームの活動、現状分析のための調査としての「妊娠リスクスコア」を用いた調査結果を報告した。エビデンスに基づいた質の高い看護を効率よく提供するための活動、補完代替療法を取り入れたケアとしてアロマセラピーの活用などのほか6つの役割の事例の実際を紹介した。役割獲得にあたり必要な能力は、説明能力・ネゴシエーション能力、活動の基盤づくり、地区分析・組織分析、マーケティング能力、コーディネーション能力、プロジェクトマネジメント能力であった。地域・組織にあったハイリスクケアチーム・システムの構築が課題である。</p>
7. 周産期ハイリスク事例継続ケアシステム構築のための活動(抄録査読付)	共	2013年7月	第49回日本周産期・新生児医学会学術集会(神奈川)	<p>専門看護師として、ハイリスク事例に対する適切な母子継続支援のため、周産期ハイリスク事例継続ケアシステムを構築し、外来、MFICU・産科病棟、NICU、地域間の情報共有と円滑な連携を図った。ハイリスク事例の継続ケアとして、周産期継続看護記録作成、助産外来外来開設、MFICU・NICU合同看護カンファレンスの3つを実施した。妊娠中から地域と連携し個別性の高い関わりや適切な育児環境の調整が可能となり、ハイリスク事例のみならず、潜在的な問題を抱えている事例に対するスタッフのケア意識が高まった。ハイリスク症例が多く介入優先度の判断が課題である。</p> <p>担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察</p> <p>担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は困難 共著者名：山口舞子、大久保智治、山田俊夫</p>
8. 赤十字病院における専門看護師の活動 活動の変遷に焦点を当てて(抄録査読付)	共	2012年10月	第48回 日本赤十字社医学会総会(香川)	<p>日本赤十字専門看護師会に所属する専門看護師の活動の変遷について報告した。同会に所属する専門看護師の活動報告を分析対象とした。結果、専門分野は、2009年6領域16名より2012年5月現在10領域24名となった。組織の位置づけは、看護部長直属、看護部フリーポジション、病棟、外来など様々であった。活動内容は、専門分野関連の実践・調整・相談・倫理調整や教育、研究に携わり、6つの役割を果たしていた。組織内のチーム活動の推進、専門性を生かした専門外来の立ち上げなど、役割拡大があった。領域の特性を生かし、患者・家族の多様なニーズに応えるとともに、組織横断的に活動しチーム医療の推進を担っている。連携を深め、赤十字全体の看護の質の向上に貢献していくことが課題である。</p> <p>担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察</p> <p>担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は困難 共著者名：田中 結美、山口舞子、部川 玲子</p>
9. 赤十字病院における専門看護師の活動 活動の現状と成果に焦点をあてて(抄録査読付)	共	2012年10月	第48回 日本赤十字社医学会総会(香川)	<p>日本赤十字専門看護師会の活動で、16病院28名の専門看護師の活動について、同会の専門看護師を対象とし、2011年度の活動状況を調査した。看護協会認定11特定分野中、10分野で活動している。患者・家族への直接ケア、医療スタッフからのケアに関する相談、組織横断的な活動に加え、倫理検討会、教育活動、研究支援、院外施設での講義や共同研究等を実施し、専門看護師の6つの役割を果たし、サブスペシャリティー活動もある。個人・チームのケアの質を上げるための具体的方策・提案を行い、事業企画や実行のサポート等の活動成果がある。広報活動を継続しつつ、全国連携し専門看護師を有効活用できるシステム構築が課題である。</p> <p>担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察</p> <p>担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は困難 共著者名：山口舞子、田中 結美、部川 玲子</p>
10. 赤十字病院における専門看護師の活動 病院間での専門看護師活用の実態(抄録査読付)	共	2012年10月	第48回 日本赤十字社医学会総会(香川)	<p>北見赤十字病院で看護実践者ラダー教育を進める際に、日本赤十字専門看護師会の交流活動を活用した。担当講師等の問題から未実施だった家族看護教育を日本赤十字専門看護師会を活用し、同会に所属する家族支援専門看護師を講師として「家族関係の調整 基本編・応用編」の講義を企画した。講義ではグループワークや演習などを取り入れたより実践に</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
				近い研修となるよう講師と打ち合わせを行った。赤十字病院間での専門看護師活用として当院で初めての取り組みであり、今後、他施設でも専門看護師が活用促進される一助となる。 担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は困難 共著者名：部川 玲子、田中 結美、山口舞子
<b>3. 総説</b>				
1. 【異常分娩の助産ケア】異常の見極め方 分娩進行時の母体・胎児のモニタリングと分娩進行のポイント	単	2019年5月	臨床助産ケア：スキルの強化 11巻3号 pp. 2-9	胎児心拍モニタリングの基礎知識として、正しい装着方法と判読ポイント、CTGの判読について記述した。判読においては、波形診断ポイントと、緊急対応が必要な胎児心拍モニタリング波形とそのレベル別対応・処置について、5レベル、82パターンレベル分類を基に説明した。また医師への助産師の報告方法についても具体例を示した総説を執筆した。
2. ハイリスク妊産婦のレベル分けによる適切な支援体制の構築 産科診療所での取り組みと医療機関・地域連携の実際	単	2019年2月	公衆衛生、83巻2号、p. 143-147	病産院施設から地域保健担当者へのハイリスク妊産婦連携において、病院側はどこまで連絡したらよいかグレーゾーンの対応に迷い、施設によって連絡基準相違があった。また、地域保健師からはハイリスク連携票から優先順位を判断できると効率よく適切な家庭訪問に活用できると意見があった。そこで、対象者の緊急性・優先性のレベルを3段階に分け、そのレベルに応じた対応方法を定め、1市4町の圏域ルールをとして施行した。その実際、施行後のレベル別集計、今後の課題等について、特定妊婦への継続支援を地域連携の視点で執筆した。
3. 緊急対応が必要な胎児心拍数モニタリング波形	単	2015年4月	救急看護トリアージのスキル強化 4巻6号 P91-98	ケースで学ぶ妊産婦特有の緊急時・急変時の見方と対応の連載の第4回において、救急部で勤務する看護師を対象として、産科と新生児科と連携した緊急対応が必要な事例についての総説を執筆した。妊婦の受け入れ準備の整え方として必要物品準備、配置例を紹介した。また、胎児心拍モニタリングの正しい装着方法と判読ポイントとして、CTGの説明、CTG機器の装着手順、CTGの判読について記述した。判読においては、基線再変動、心拍数基線、一過性徐脈の3つの波形診断ポイントと、臨床でよく使われる略語について解説した。救急対応が必要な胎児心拍モニタリング波形とそのレベル別対応・処置については、基線細変動・基線・一過性徐脈による5つのレベル、82パターンレベル分類を紹介した。波形レベルに応じた一般的な医師と助産師の対応について、わかりやすい表を作成して提示し、各施設におけるレベル別対処の情報共有・検討の必要性について解説を執筆した。
4. 【異常分娩を見極め対応できる助産技術】肩甲難産となった経産婦	単	2014年5月	臨床助産ケア：スキルの強化 6巻3号 P77-84	異常分娩の見極めと、その異常に対応できる助産技術として、事例を用いて肩甲難産時の対応についてまとめ、肩甲難産時の娩出法についての解説を執筆した。 肩甲難産の定義と重症例の判定、リスク因子について図表を用いて解説した。また、回旋異常・吸引分娩・肩甲難産になったケースのケアの実際として、児頭発露までのアセスメントと心理状態・対処、発露後児頭娩出している最中から児頭娩出直後までのアセスメントと心理状態・対処を記述し、良かった点、検討すべき点、さらに良くなったと考えられる点について振り返った。肩甲難産時の対応については、American College of Obstetricians and Gynecologists Practice Bulletin(2002)に沿って対応の手順とポイントや禁忌について紹介した。直接介助者、間接介助者として助産師に求められること、新生児の合併症について執筆した。
5. 早産・流産を経験した対象へのケア	共	2012年11月	妊産婦と赤ちゃんケア 4巻6号 P36-42	ハイリスク妊産婦へのケアとサポート特集の中で、早産・流産を経験した対象へのケアについて執筆した。所属施設での妊産婦のメンタルサポート体制について紹介し、ケースバイケースでの対応をするにあたっての、理論を活用したケア、ベビーマッサージやアロマセラピーを活用したケアとともに、流産を経験した対象のケアの際、臨床スタッフが心がけていること、声掛けの実際について執筆した。 担当部分：執筆全般 担当ページ：共同執筆につき本人担当部分の抽出は困難 共著者名：山口舞子、中野絹子
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1. 生殖補助医療を受けた妊産婦の周産期メンタルヘルスケア不安を中心とした量的解析	共	2019年4月～現在	科学研究費助成事業（基盤C）	（研究代表者）近藤祥子 研究分担者大西舞子 古田真里枝 山田重人 不妊治療の普及は著しく、我が国での出生児のうち5人に1人は高度生殖補助医療によって誕生している。不妊治療後の出産ではメンタルヘルス問題があるのではないかと臨床現場では感じられているが、その現状は明らかとなっていない。本研究では、不妊治療大国である我が国において、不妊治療と周産期メンタルヘルスの関係について明らかにする。ここから不妊治療後の妊娠・出産に求められるケアを提供し、安定した母子関係を構築して健全な次世代の育成に寄与することを目的とする。
2. 妊娠・養育に関する心理社会的ハイリスク妊婦チェックシートの開発	単	2016年8月25日～現在	科学研究費助成事業（研究活動スタート支援）	大西舞子（研究代表者） 近年我が国では、全国的に心理社会的ハイリスク症例の増加が懸念されている。ハイリスク妊婦をキャッチしきれていない現状があり、妊婦全例に医療者側からのみのスクリーニングだけで対応することには限界がある。妊婦側と医療者側の双方からの評価が必要だといえる。妥当性・信頼性を明らかにし、心理社会的ハイリスク妊婦を早期から効率よく把握するための妊婦自己記入式質問紙及び医療者用チェックリストを開発する。それらを活用することで、妊娠早期から母児やその家族への適切な介入を行うことができ、健やかな妊娠生活と児の安全な養育環境の確保を目指す。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2019年9月26日	西宮市 女性出前健康講座 講師
2. 2019年4月27日	日総研セミナー講師 「異常分娩の見極め方と助産技術」
3. 2019年4月～現在	大阪府助産師会 電話相談 相談員
4. 2018年9月～現在	日本看護科学学会
5. 2018年4月～現在	大阪府高槻市【親子講座】ファーストシューズ講師
6. 2018年4月～	大阪府立大学大学院看護学研究科 看護学専攻(修士課程) 非常勤講師
7. 2018年4月～現在	日本看護協会 助産実践能力習熟段階(クリニカルラダー) CLoCMiP研修講師
8. 2017年4月～2018年3月	日本周産期新生児医学会
9. 2017年4月～現在	大阪府高槻地区周産期連携の会
10. 2016年5月～2016年3月	第19回日本母性看護学会学術集会 事務局、企画・実行委員
11. 2016年4月～現在	日本母性衛生学会
12. 2016年4月～現在	日本助産学会
13. 2015年9月～2016年9月	第15回日本アディクション看護学会学術集会 実行協力員
14. 2014年4月～現在	大阪医科大学大学院 看護学研究科 看護学専攻(修士課程) 非常勤講師
15. 2014年4月～現在	日本母性看護学会
16. 2014年4月～2016年3月	富山大学大学院 医学薬学教育部 看護学専攻(修士課程) 非常勤講師
17. 2013年6月～2014年1月	滋賀母性衛生学会 実行委員
18. 2013年4月～2017年3月	京都府看護協会新人助産師研修 講師
19. 2013年4月～2015年3月	日本看護協会 専門看護師協議会 母性分野事務局
20. 2013年4月～現在	医療法人青葉会 神野レディスクリニック本院 助産師・母性看護専門看護師 非常勤勤務
21. 2013年4月～現在	京都第一赤十字看護専門学校 非常勤講師
22. 2012年4月～2016年3月	日本赤十字豊田看護大学大学院 看護学研究科 看護学専攻(修士課程) 非常勤講師
23. 2009年4月～2010年3月	日本看護協会 看護総論 査読委員